

平成26年度
総研大葉山年報



国立大学法人

総合研究大学院大学

SOKENDAI (THE GRADUATE UNIVERSITY FOR ADVANCED STUDIES)

平成26年度総研大葉山年報

平成26年度総研大葉山年報

発行日：平成27年 3 月 1 日

発行：総合研究大学院大学

無断複写・転載禁止 Printed in Japan

はじめに

学長 岡田 泰伸

現在のわが国は、深刻な財政赤字と少子高齢化・人口減により非常に厳しい状況に置かれており、大学にもそれに見合った改革が既に長く求められてきました。多くの大学が早くから改革に取りかかっている中で、この総研大の改革は周回遅れの状況にあることに、平成26年度より総入替の形で着任した私達新執行部は気付かされました。その結果、総研大は次の4つの問題点を持つ危機的状況にあることが判明しました。それは第1に、葉山と基盤機関が別法人に置かれ、基盤機関もまた5つの異なる法人に分断されたことによって、葉山と基盤専攻の間の関係が薄れ、両者の間に乖離が生じていたことでした。第2には、その結果として、葉山本部・先端研と他大学および研究者コミュニティの間にも乖離が生じてしまっていました。というのは、大学共同利用機関そのものではない葉山は、他大学や研究者コミュニティとの連携は基盤専攻を介して取られる仕組みとなりがちであったからです。第3には、それらも原因して、葉山内部においても本部と先端研と2センターの間に乖離が生じてしまっていました。第4には、これらが相絡まって総研大と社会の間にも乖離が生じ、総研大やSOKENDAIの認知度が低いままの状態にとどまっていた。そこで、新執行部は、これらの状況を打破するために、4つのレンケイをキーワードに、6つの取組を行い、3つのミッションの実現を、5つの機構と一体となって行うという、いわゆる「4・6・3・5改革」を進めるというビジョンを掲げました。その具体的項目は、本年報の本文に挙げた通りであり、これらの取組と対策を第2期中期目標・中期計画期間の残された2年間の間にできるだけ実行することこそが、第3期の機能強化（大学改革）実現のための準備体制を整えることになるものであると考えたのです。

以下では、平成26年度を取組み結果と成果を、4つのレンケイと4つの乖離への対策、そして平成25年1月に実施された先端研外部評価の結果への対応に関連させて、列記します（詳細は本年報の本文参照）。4つのレンケイの第1の「異分野連繫」については、①学融合推進センターがサポートする共同研究として新たに「学融合共同研究」を立ち上げて、研究科もしくは機構を跨いで行われる異分野連繫的な共同研究プログラムとして公募することを開始しました。また、②専攻や研究科を跨いで行われる「分野横断型教育プログラム」を育成・推進し、第3期からの新たな展開の基礎とする努力を、長谷川教育担当理事が中心となって行いました。2つ目の「基盤機関関係」のために次の3点を実施しました。①専攻長を務めておられない機関長も含めて全機関長に教育研究評議会か経営協議会のいずれかに加わってもらうことにしました。②入学式と学位記授与式の際の年4回、学長・理事と機関長の懇談会を開催することにしました。そして、③学融合推進センター共同研究プログラムとして、基盤専攻教員と葉山教員と国外研究機関研究者と学生・修了生が加わる異分野連繫的共同研究プログラムとして新たに「グローバル共同研究」を立ち上げて公募することを開始しました。3つ目の「社会連携」に関しては、次の4点を実施しました。①まず、平成26年4月より新たに社会連携担当理事を置き、永山理事にこれにあたってもらうことにしました。②そして、平成26年度には、総研大ホームページの改良や、総研大卒業生ネットワークサイトとしてのSOKENDAI A-netの新たな立ち上げや、横須賀高校との高大連携「横高アカデミア」の科学アドバイザーを永山理事が務めて計8回の講師派遣を行うなどの活動を行いました。③平成27年4月より新たに総研大に「国際・社会連携推進部」を設置し、これを事務所掌する「国際・社会連携課」を本部事務局に設置するための諸手続と体制を平成26年度中に取りました。そして、④新入生等に研究倫理を含めた「科学と社会」に関する全学的教育を行うため

に、長谷川教育担当理事が中心となってフレッシュマンコース教育プログラムを整えていただきました。そして、その結果、6研究科のうち4研究科においてこれを必修としていただきました。4つ目の「国際連携」に関しては、①平成26年4月より新たに国際連携担当理事を置き、田村理事にこの任にあたってもらうことになりました。②平成26年度において、台湾、タイ、ベトナム、マレーシアでのJASSO日本留学フェアに参加するなどの国際広報活動や、韓国科学技術聯合大学院大学校(UST)との学術交流協定に基づいての2国間合同セミナーのDaejeonでの開催、多数学生の海外派遣や海外からの招聘を支援するなどの国際学術交流活動を行いました。そして、③上記の「国際・社会連携推進部」と「国際社会連携課」を平成27年4月より新たに設置するための諸手続と体制を平成26年度中に整え終わりました。

4つの乖離の1つ目の「葉山－基盤専攻間乖離」に対しては、上記の「基盤機関関係」のための3つの取組みに加えて、まず第1に何よりも基盤専攻教員に総研大教育任務が「併任」で行うものであるとの誤解を払拭していただき、大学設置基準上においてもあくまで「専任教員」であるとの意識改革を訴えました。そして第2に、学長が17基盤機関すべてを訪問し、機関長・専攻長・専攻教員および学生との直接交流をもつことを平成26年度において行いました。さらに、第3に、学長から全在生に対してダイレクトメールメッセージを「Yasu 通信」として発信することを開始し、平成26年度においては計3回行いました。2つ目の「葉山組織内乖離」に対しては、「連絡協議会」を葉山における全部局長が参加する形に拡大すると共に、葉山教員の全学事業寄与に対するインセンティブ研究費配分を行うことを開始して、先導研と2センターの間の協力関係の促進を図りました。3つ目の「総研大－他大学・研究者コミュニティ間乖離」に対しては、上記の「グローバル共同研究」と「学融合共同研究」プロジェクトに他大学教員や修了生の参加を前者には義務づけ、後者には推奨すると共に、優れた修了生に対して報奨・顕賞する「総研大科学者賞」を新たに設置し、平成27年4月発表の第1回授賞者の選考を終えました。4つ目の「総研大－社会間乖離」に対しては、まず総研大の国際的・国内的認知度・知名度を向上させるための取組として、次の4点を行うことから開始しました。即ち、①基盤専攻教員には学生が共著者となる論文においては当然のこと、そればかりか学生が共著でない論文においても総研大を所属機関として、必ず併記してほしいというキャンペーンを行いました。②その総研大の英文表記法としては、これまでの「The Graduate University for Advanced Studies (Sokendai)」を「SOKENDAI (The Graduate University for Advanced Studies)」に改めることにしました。③総研大科学者賞や総研大未来科学者賞の授賞式など、種々のイベントのウェブ上での広報を促進・充実化しました。④国内・国外の修了生との連携を推進し、「総研大アラムナイ」形成に向けた取組みを開始しました。

平成25年1月に行われた先導研の外部評価における主たる結論は、まず第1に先導研で現在行われている生命進化学研究を更に大きく発展させること、第2に「科学と社会」に関する教育研究を全学化させること、第3に学融合推進センターを先導研にとって「基盤機関」的に位置付けて、基盤専攻や他大学との共同研究を推進することの3点でしたが、これからの大学改革においてこれらの提言をいかに反映させるのかも新執行部には問われていました。平成26年度においては、第1の点については、「再生学」や「情報科学」との関連における展開など、いくつかの議論が行われましたが、未だ結論を得るに到っておらず、次年度以降の課題に残されています。第2の点については、ほぼすべての新生が参加するフレッシュマンコースに「科学と社会」教育を取り入れることによって開始することができました。第3の点については、基盤専攻教員と葉山教員が中核となる学融合推進センター「グローバル共同研究」を試行的に立ち上げることによってまず第一歩を進めてみることにしましたが、本格的な推進のためには、今後の学融合推進センターのあり方の見直しも含めた改革が必要であることが明らかとな

りました。

平成27年度においては、これらの諸取組を更にグレードアップし、平成28年度からの第3期における機能強化・大学改革の本丸的実現のための準備体制を整え、それに向けての概算要求を行っていくことにしたいと考えています。本年報がそのための足場的な資料となり、第3期から本格的に着手するIR活動の出発点を与えるものと考えています。

目次

1	総研大の目標と平成26年度の方針	1
1.1	4・6・3・5改革	1
2	全学的教育事業の整備と実施	2
2.1	第1層の教育事業	2
2.1.1	フレッシュマンウイークの試験的实施と整備	2
2.1.2	学生企画事業の実施と拡充	3
2.1.3	「科学と社会」の全学教育	3
2.2	第2層の教育事業	5
2.2.1	総研大レクチャーの実施と整備	5
2.3	第3層の教育事業	6
2.3.1	研究科合同セミナー	6
2.3.2	特別教育プログラム	8
3	全学的研究事業の整備と実施	8
3.1	平成26年度からの新しい共同研究の枠組み	9
3.2	論文出版補助事業	11
4	全学基盤的事業の拡充	11
4.1	広報活動	11
4.1.1	大学ウェブページ	11
4.1.2	プレスリリース	11
4.1.3	広報連絡会	11
4.2	本部図書館	12
4.2.1	e-journal	12
4.2.2	SOKENDAI リポジトリ	12
4.3	アーカイブズ	12
4.4	情報基盤整備	13
4.5	学生のための賞	13
4.6	修了生ネットワーク	15
5	国際連携	16
5.1	アジアの大学との交流(日本留学フェア等)	16
5.1.1	台湾の大学・研究所	16
5.1.2	ミャンマー、タイの大学	16
5.1.3	ベトナムの大学、研究所	16
5.1.4	ドイツ・オーストリア	17
5.1.5	マレーシア・シンガポールの大学	17
5.2	総研大-UST 共同セミナー	17

5.3	ベトナム科学技術アカデミーの訪問	18
5.4	JSPS サマープログラム	18
5.5	アジア冬の学校	19
5.6	体験留学プログラム	20
5.7	海外学生派遣事業	21
5.8	若手教員海外派遣事業	21
5.9	国際研究集会開催支援事業	22
5.10	海外学生・研究者招聘プログラム	23
6	社会貢献・社会連携	23
6.1	学校教育への協力：横高アカデミア	23
6.2	地域貢献	24
6.2.1	講演会開催など	24
6.2.2	本部図書館の利用	25
付録 A	平成26年度行事日程	26
付録 B	役員、特任教員の研究業績	26
付録 C	学生の論文等の業績	27

1 総研大の目標と平成26年度の方針

平成26年4月に岡田泰伸学長が就任し、総研大のこれまでの活動をふまえさらにパワーアップすべく、大きな方針のもとにさまざまな改革を行いました。この章ではこの「大きな方針」について解説します。

1.1 4・6・3・5改革

「4・6・3・5改革」というのは、4つの「レンケイ」によって、6つの取り組みを行い、3つのミッションを、5機構（人間文化研究機構、自然科学研究機構、高エネルギー加速器研究機構、情報・システム研究機構、宇宙航空研究開発機構）と一体的に行うもので、最終目標は、高度専門性と総合性を兼ね備えた人材の育成です。新しい学術問題を発掘し、学問的、社会的な新しい課題を設定できるような研究者を育成することであるとも言えます。これまでも部分的には総研大が取り組んできたものもありますが、岡田泰伸学長のもとに、体系的な方針となりました。

■ 4つのレンケイ とは、以下のことです。

1. 異分野連繫（interdisciplinary）
2. 基盤機関連係（inter-institutional）（3.1章参照）
3. 社会連携（innovative & society-interactive）（6章参照）
4. 国際連携（international）（5章参照）。

■ 6つの取り組み は次のようになります。

1. 総研大のミッションと目標の明確化と共有化
2. 教育システムの改革とさらなる国際化（2章、5章参照）
3. 科学・社会連携学（仮称）の研究教育の開始（2.1.3章参照）
4. 葉山と基盤機関との関係強化
5. 葉山の組織改編と研究強化
6. 地域社会との連携強化（6章参照）

■ 3つのミッション は総研大の目標そのものとも言えるもので、以下のようになります。

1. 異分野連繫的・社会連携的・国際的若手研究者の育成（教育のミッション）
2. 異分野連繫的・先導的（新分野開拓的）研究を大学院生と一緒に展開（研究のミッション）
3. 研究教育におけるアジアの拠点になる（国際的ミッション）

総研大では各分野で日本を代表する研究所（共同利用機関）が専攻における教育を行っていることから、高度専門性に関する教育については基盤専攻（共同利用機関等に設置されている専攻）において、総合的な教育は葉山で行う、という任務分担が自然に行われてきました。しかし、「3つのミッション」を達成するためには、これまで以上に体系的、組織的な総合教育を行なうことが必要です。高度専門性は総合性の基礎の上に築かれるものであるという認識のもとに、総合性教育と高度専門教育を進めることが必要です。

この年報ではこの「4・6・3・5改革」の観点から総研大葉山本部の取り組みを概括します。

2 全学的教育事業の整備と実施

教育事業を、仮に以下のように分類します。

- 第1層 全分野を包含する広い視野、学識を与える教育： 学生セミナーのように全専攻の新入生が合宿して、共通した課題について講義を受けたり議論を行うもの、など。
- 第2層 複数の研究科にまたがる教育事業： たとえば、統合生命科学教育プログラムでは、生命科学研究所、先導科学研究科、複合科学研究科の全専攻の他、分子科学の2専攻の学生を主な対象としています。
- 第3層 研究科内の複数専攻に関わる教育： 文化科学研究科学術交流フォーラムは文化科学の全専攻の教員、学生を対象に1泊2日でセミナーやワークショップを開催して、学術的な交流を行うものです。（ただし、それ以外の研究科の学生も希望すれば参加可能です。）また、高エネルギー加速器科学研究科では特に5年一貫課程の1年時の学生には全専攻共通の講義（高エネルギー加速器科学セミナーなど）を行っています。
- 第4層 専攻における教育

専攻における講義もそのほとんどのものは他専攻、他研究科にも開かれていますので、上記の分類は「主たる対象」によるものであって、厳密なものではありません。

2.1 第1層の教育事業

2.1.1 フレッシュマンウイークの試験的实施と整備

第1層の講義としては、これまで学融合推進センターが提供する「学生セミナー」、先導科学研究科が提供する「科学・技術と社会 I,II」などが個別に行われてきました。

平成26年度春には、「学生セミナー」（学融合推進センター担当）の他に、「科学と社会」（先導研担当）、ITリテラシーに関する講義（情報基盤センター担当）、学長との懇談会、研究科オリエンテーション（各研究科で担当）なども加えた4日間の講義として全専攻の新入生に履修を推奨する「フレッシュマンウイーク」が試行的に行なわれました。（講義科目としては「学生セミナー」、「フレッシュマンコー

ス」が各1単位。) ここで行われた「科学と社会」の講義は「科学・技術と社会 I,II」とは別のものでしたが平成 27 年度に行われるフレッシュマンコースの原型となっています。(2.1.3 章を参照。)

また、秋には英語で行われる「学生セミナー」(1 単位)、「科学・技術と社会 I」(1 単位)に加えて「総研大ガイダンス」(颯田葉子先導科学研究科教授)、「研究者入門」(桂勲遺伝学専攻長)などの授業を行い、フレッシュマンウイークとしました(10 月 7 日-10 日)。

これらの試行をもとに、さらに総合的な講義を提供するために平成 27 年度に向けて「課程制大学院制度の実質化に向けた学長イニシアティブ事業」特別委員会で検討を行い、平成 27 年度からは、フレッシュマンコース(2 単位)として一体的に計画された講義として実施することとなりました。春は日本語で、秋は英語で行われます。この講義は入学式直後に合宿形式で行ない、第 1 層の教育に重点を置くもので、自分とは異なるさまざまな専攻の学生との交流を通じて、研究者としてのアイデンティティーを確立するためのものです。5 年一貫制博士課程を持つ 5 研究科のうち 4 研究科では必修科目となりました。

2.1.2 学生企画事業の実施と拡充

学生企画事業は学融合推進センターが行なう事業で、学生が応募し、学生のグループが活動を行うものです。国際共同研究・共同事業を推進できる研究者を専攻・研究科の枠を超えて育成する事業に対して助成することを目的とします。これらの事業は複数研究科の学生によって実施されました。平成 26 年度には以下の事業が採択されました。

- 産学・地域連携による交流型環境教育プロジェクト: 「奈良のシカ」の保護活動から学ぶ都市における人と動物との共生(地域文化学専攻・東城 義則): 天然記念物「奈良のシカ」とその保護育成団体である一般財団「奈良の鹿愛護会」の活動を学習する環境教育事業の実施を目的としました。『学融合推進センターニュースレター』No.19 の報告などがあります。
- Sokendai Student Conference 2014 (情報学専攻・Osamunia Mohamed): 様々な専攻に属する学生が協力して、様々な専攻を訪問し教員にインタビューを行い、異なる専攻間の違いについて知見を共有する企画でした。

2.1.3 「科学と社会」の全学教育

■先導科学研究科が提供する授業 先導科学研究科が提供する総合授業科目「科学・技術と社会 I,II」は、責任ある研究者に必要な「科学と社会」に関する知識・責任感・倫理感を学ぶためのもので、入学式のあと葉山で開講され、春は日本語で、秋は英語で行なわれてきました。先導科学研究科の学生にとっては必修科目ですが、総研大では専攻を問わず、必須の基礎教養として履修を推奨してきました。

「科学・技術と社会 I」(日本語)は、平成 26 年 4 月 17、18 日に行われました。フレッシュマンウイ

クの翌週に開催されたためか、履修者は例年より少なかったです。

「科学・技術と社会 II」（日本語）は 12 月 4、5 日に葉山で開講されました。

「科学・技術と社会 I」（英語）は平成 26 年 10 月 9、10 日にフレッシュマンコースの一環として行われました。

「科学・技術と社会 II」（英語）は平成 27 年度の開講とされました。

これらの試行を経て、平成 27 年度には「科学・技術と社会 I」に対応する講義はフレッシュマンコースで行なうことになりました。この講義は特別経費プログラム「『科学知』の総合化を目指す大学院教育プログラムの推進」を実施するための特別委員会（「科学知委員会」）によって検討、実施されるものです。

この他、先導研では「生命科学と社会 I,II」も全学開講科目として提供しています。

■特別経費事業：「科学知」の総合化を目指す大学院教育プログラムの推進 本学における「科学と社会」教育の基盤を形成することを目的とする特別経費事業で平成 22 年度から 27 年度まで実施しています。事業概要は次のようなものです：

現代科学を担う研究者養成を重要な使命とする本学において、科学技術に対する社会からの要請や人々の信頼に応え、国際的視野に立って大局的判断ができる視野の広い研究者専門的職業人を育成することを目指して、科学知の総合化を推進するとともに、文理の分野の壁を越えた共同研究、アウトリーチ活動など、総合的視野に立った『科学と社会』に関わる大学院教育プログラムを展開する。

平成26年度のフレッシュマンウイークにおける講義の準備、実施をはじめ、全学的なセミナー、研究会を開催し、それらの実践を基礎に総研大における「科学と社会」教育の構想をたてています。

平成 26 年度の活動は以下のようになります。

- 「科学と社会」教育プログラムの設計と実践
 - 全学向けコースワークの設計・実践・充実: 科学の社会的側面について備撤的な視座を与えるコースワークの提案と実施。
 - 専攻別ワークショップの設計・実践・充実: 個別の専門性に関連するテーマに絞ったワークショップを通じた教育パッケージの提案と実施。
- 「科学と社会」分野の蓄積を活用した新たな大学院教育の在り方についての議論と情報共有の場の設定。
 - シンポジウムやワークショップの開催 (アウトリーチ活動として)。
 - 大学院教育の現状と課題について情報共有。
- 先進事例についての調査と資料の作成。

- ・さまざまな関連学会における「科学と社会」教育プログラムに関するワークショップの実施による情報共有。

2.2 第2層の教育事業

2.2.1 総研大レクチャーの実施と整備

総研大レクチャーは総研大の教員が中心となつて行なう合宿型の集中講義で、学生に広い視野を与えるために行なっています。実施の提案のある教員からの申し込みを学融合推進センター運営委員会で審議して採用します。対象は第1層から第3層の範囲に入るものです。また、他大学大学院生にも開かれる講義とすることができます。

■平成26年度 平成26年度に実施したレクチャーは以下のようになっています。

- ・ 研究者のための社会リテラシー（学融合推進センター・平田光司、生命共生体進化学専攻・標葉隆馬）
- ・ ワークショップデザイン講座（学融合推進センター・奥本素子）
- ・ 科学コミュニケーション（広報室・眞山聡）
- ・ 日本歴研究の方法 A-資料調査法-（日本歴史研究専攻・大久保純一）
- ・ 日本歴研究の方法 B-地域研究の方法-（日本歴史研究専攻・柴崎茂光）
- ・ 日本歴研究の方 C-博物館とは何だろう-（日本歴史研究専攻・村木二郎）
- ・ 科学技術倫理と知的財産権—学術研究の適切なすすめ方（メディア社会文化専攻・児玉晴男）
- ・ アーカイブズ学集中講義（日本文学研究専攻・渡辺浩一）
- ・ 資料保存科学（モノ資料・基礎）（比較文化学専攻・園田直子）
- ・ 学術映像の基礎 -みる・つくる 2014（地域文化学専攻・久保正敏）
- ・ 国際コミュニケーション（学融合推進センター・岩瀬峰代）5.4章参照。
- ・ 総研大-UST共同セミナー（学融合推進センター・平田光司、学融合推進センター・桑島邦博）5.2参照。

■平成27年度 総研大レクチャーについては平成26年度中に検討を進め、平成27年度から以下の点で改変、改良を行なうことになりました。

- ・ 講義の対象を第1層から第2層のものに限定しました。（第3層、4層については研究科において行なうものとして整理しました。）
- ・ その点を明確にするために名称を「学融合レクチャー」としました
- ・ 担当教員は（学融合推進センターの教員や外部からの講師も入って良いが）複数の研究科から出

ていることを条件としました。

- さらに、従来は実施日程や講師の詳細については年度途中で決定し、全学的に周知、受講の募集を行なってきましたが、年度初めの段階で日程、講義内容を確定しシラバスとして周知する体制としました。これによって、学生は日程調整が容易になり、受講の機会が増えるものと期待されます。

平成 27 年度の学融合レクチャーは 26 年度中に募集、選考が終了し、以下の講義が採択されました。カッコ内は担当教員です。

- 学術映像の基礎－みる・つくる 2015（地域文化学専攻・岸上伸啓、天文科学専攻・縣秀彦など）
- 科学技術倫理と知的財産権（メディア社会文化専攻・児玉晴男、生命共生体進化学専攻・平田光司など）
- 科学と対話（情報学専攻・坊農真弓、メディア社会文化専攻・加藤浩、学融合推進センター・奥本素子など）
- 科学コミュニケーション（基礎生物学専攻・倉田智子、生命共生体進化学専攻・平田光司など）
- 研究と社会（生命共生体進化学専攻・伊藤憲二、宇宙科学専攻・松原英雄など）
- 太陽系の科学：南極探査と惑星探査の最前線（学融合推進センター・小松睦美、極域科学専攻・小島秀康、宇宙科学専攻・安部正真など）
- 第 2 回総研大－U S T 共同セミナー、「ビッグデータと計算科学」（情報学専攻教授・宇野毅明、生理学専攻・池中一裕、生命共生体進化学専攻・佐々木顕など）

この内、「科学と対話」は科学技術未来館における実習を別にすれば総研大遠隔講義支援システム (TELAS) を用いるリレー講義として行なわれる予定です。

2.3 第 3 層の教育事業

研究科を単位とする総合的な教育事業です。研究科の学生と教員が参加して研究交流を行う「研究科合同セミナー」、複数の専攻が協力して行うコース・プログラムもあり、総研大における受講可能な講義の幅はきわめて広がっています。第 3 層の教育についても簡単にご紹介しておきます。

2.3.1 研究科合同セミナー

■生命科学リトリート 生命科学リトリートは、平成 16 年度に「生命科学・先導科学研究科合同セミナー」としてスタートし平成 23 年度より「生命科学セミナー」と改称されたプログラムです。生命科学の研究教育に携わる基礎生物学専攻、生理学専攻、遺伝学専攻および生命共生体進化学専攻の 4 専攻の教員と学生が一堂に会して学術交流を行う希少な機会となっています。平成 23 年度からは上記 4 専攻以外の学生にも参加を呼びかけ学術交流の幅がさらに広がっており、分野横断的なユニークな教育の

場として学生からも教員からも高い支持を受けています。平成 26 年度は、第 11 回としてこれまで同様一泊二日で学生による研究発表と意見交換会を中心に実施しました。

日時：平成 26 年 10 月 16～17 日（1 泊 2 日）

開催場所：ヤマハリゾートつま恋コンベンションホール（静岡県掛川市）

参加者数：144 名（学生 97 名、教員 47 名）

■複合科学クロストーク 情報・システム研究機構が主催する若手研究者クロストークを共催し、複合科学研究科と遺伝学専攻の教職員・学生が「これからの研究の方法論」、「これからの研究の倫理」および「融合研究のテーマ発掘とその進め方」をテーマに学術研究交流を実施し教育連携強化を図ると共に、学生による研究発表を実施しました。

日時：平成 26 年 9 月 25～26 日（1 泊 2 日）

開催場所：湘南国際村センター

参加者数：52 名（学生 10 名、教員 42 名）

■文化科学研究科学術交流フォーラム 文化科学研究科の学生と教員が協力して実施しました。その目的は文化科学研究科所属の全専攻の学生と教員が交流し合うことで、教育・研究の質の向上と、最新の研究に関する情報を交換し合うこと、そして本研究科の教育研究成果の一端を全学並びに一般社会に公開することにおきました。平成 26 年度には「文化をカガクする？」をテーマとし、フォーラムでは研究報告（口頭、ポスター）と質疑応答だけでなく、各専攻に豊富に存在する学術資料を活用したワークショップも実施しました。学生の研究能力とプレゼン能力の向上とともに、学術資料の取り扱い技能の向上も期待したものです。（文化科学研究科以外の本学学生の参加もありました。）

日時：平成 26 年 12 月 20～21 日（1 泊 2 日）

開催場所：国立民族学博物館

参加者数：70 名

二日目は一般の来場者も参加できる形式とし、午後開催の「大元神楽研究公演」は 280 名を越える観客がありました。

■スチューデント・デイ 高エネルギー加速器研究機構では、総研大高エネルギー加速器科学研究科の学生および同機構で学ぶ大学院生の研究成果を発表し合うことを目的に平成 26 年度から開催することにしました。平成 26 年度には 100 名ほどの学生が参加しました。

2.3.2 特別教育プログラム

■物理科学コース別大学院プログラム 正式名称は「広い視野を備えた物理科学研究者を育成するためのコース別大学院教育プログラム」です。物理科学研究科と高エネルギー加速器科学研究科が合同で行う双方にまたがる教育プログラムで、物理科学の学問分野での高度の専門的資質とともに幅広い視野と国際的通用性を備えた、社会のニーズに応えることのできる研究者の育成を目指した教育を行っています。

■脳科学専攻間融合プログラム 生理科学専攻が中心となって、脳科学について関連する教育・研究を行っている総研大の他専攻（基礎生物学、遺伝学、情報学、統計科学、生命共生体進化学、メディア社会文化等）の協力を得て、新たなカリキュラムを作成して実施しています。すべての講義に遠隔講義システムを使用し、遠隔地での受講が可能となっています。

■統合生命科学教育プログラム

現代的な生命科学の流れの中で、これからの生物学に寄与することの出来る研究者を育成するためには、生物科学のみならず、物理科学、数理科学、情報科学などに通じる学際的かつ統合的な生命観を育てる大学院教育がなされなければなりません。本プログラムでは、国内最先端の研究機関において幅広い分野の大学院教育が行われているという総研大の特色を生かし、統合生命科学の新しいカリキュラムを作成・実施しています。

3 全学的研究事業の整備と実施

総研大では創設以来、総研大のカバーする広範な専門分野の協力によって、新しい研究分野を開拓することを目標としてきました。学融合推進センターも重要な事業として学内共同研究を進めてきました。平成 25 年度までは以下のジャンルによる共同研究課題の募集が行なわれてきました。それぞれのジャンルにおける平成 26 年度の事業は以下のようになります（前年度からの継続のみ）。

■戦略的共同研究 I 異分野の研究者間における共同研究を通じて、これまでに無かった観点・発想・手法・技術を用いることにより新しい研究領域・方法の開拓を目指すもの。複数の研究分野に跨る課題について共同研究を推進することにより、各研究科または各専攻間における研究交流の更なる活性化と、本学の学術研究及び教育の柱となる学問領域の創成を目指し、各基盤機関に所在する各専攻が有する優れた人的・研究的環境や、高度な専門性と叡智を最大限に活用した「総研大」らしい特色ある研究テーマへの支援を行うことを目的とする。特に、センター設立の趣旨を反映し、複数専攻に所属する研究者が共同して行う研究や「学生教育を視野に入れた研究テーマ」については、優先的に支援する。（公募要領より）

- H25～H27 年度（予定）の課題
 - 自然界の様々なスケールに現れる高エネルギージェット現象の解明 (素粒子原子核専攻・板倉 数記)
 - 温度感受システムの進化生理学 ―無脊椎動物をターゲットとして― (生命共生体進化学専攻・颯田 葉子)
 - 「料理」の環境文化史：生態資源の選択、収奪、消費の過程が環境に与えるインパクト (地域文化学専攻・野林 厚志)
- H24～H26 年度の課題
 - 観相資料の学際的研究 (日本文学研究専攻・相田 満)
 - 惑星科学と生命科学の融合：生命概念の普遍化 (生命共生体進化学専攻・長谷川 眞理子)
 - 在ハワイの日本歴史・文化資料をめぐる国際共同 (日本歴史研究専攻・大久保 純一)
 - 手話言語学を世界へつなぐメディア発信 (比較文化学専攻・菊澤 律子)
 - ニュー・ミュージオロジーの確立のための研究 (地域文化学専攻・竹沢 尚一郎) (H25 年度採択)

■育成型共同研究 将来的に PI として複数分野を横断する共同研究等においてリーダーシップを発揮することが期待される次世代研究者に対する支援を行う枠組みで平成 25 年度に 1 件が採択されましたが平成 26 年度のための新規の募集はありませんでした。

継続された課題は以下の 1 件です (H27 年度までの予定)。

- 科学技術コミュニケーションの実践知理解に基づくディスカッション型教育メソッドの開発 (情報学専攻・坊農 真弓)

3.1 平成 26 年度からの新しい共同研究の枠組み

学融合推進センターの共同研究は、もともと異分野連繋的なものを目指してきましたが、「異分野」として機構を越えるような大きな枠組みのものに限定することにして、各機構で行なわれている機構内共同研究的なものとの違いを明白にしました。「異分野連繋」「社会連携」「基盤機関連係」「国際連携」の 4 つのキーワードを軸として、従来の学問分野の枠を超えた独創的、国際的な学術研究の推進、並びに社会に貢献する先導的学問分野の開拓を目的に、既存の支援事業の枠組みを再編したものです。

■グローバル共同研究の整備と実施 総研大を代表とする共同研究として「グローバル共同研究」が発足しました。基盤専攻の教員、葉山の教員、総研大の学生 (修了生も含む)、外国研究機関の研究者、総研大以外の機関の研究者を広くメンバーとして擁していることが条件です。毎年 1 件を採択し、3 年間のプロジェクトとなります。最終年度には報告をかねた国際シンポジウムの開催が義務づけられてい

ます。

平成 26 年度には課題「失われた生態システムの多様性解明に向けた古代 DNA 研究の展開」（代表 統計科学専攻 足立 淳）が採択されました。

■学融合共同研究の整備と実施 「グローバル共同研究」の準備として、また新しい発想による研究の試行として、少し条件を緩和した共同研究の枠組みです。葉山の教員が入る基盤－葉山型の組織の他に異なる研究科および機構に属する教員をメンバーとする基盤－基盤型の組織も許容されています。学生の参加についても「できるだけ」と条件を緩くしています。2年間のプロジェクトです。

平成 26 年度に採択された課題は以下のものです。

- ・ 細胞建築の博物学 (遺伝学専攻・木村 暁)
- ・ 日本列島人の起源 (遺伝学専攻・斎藤 成也)
- ・ 極域湖沼から探る?態系のメジャーランジション (生命共生体進化学専攻・佐々木 顕)
- ・ 有害捕獲された野生動物の利用とその課程で起こる諸問題の検討－カラスを例として－ (学融合推進センター・塚原 直樹)
- ・ 新たな量子物理量の基礎の探求と精密測定への応用 (素粒子原子核専攻・筒井 泉)

■萌芽的研究会制度の開始と実施状況 研究科・機構を越えた試行的な研究会を開催して共同研究のフィージビリティを検討する機会とするものです。

平成 26 年度に採択された課題は以下のものです。

- ・ 「動物福祉研究会」 1月23日 総研大葉山キャンパス 代表 新村 毅 (基礎生物学専攻)
- ・ 「人間科学から見る科学コミュニケーション」 2月12日 AP 名古屋 代表 中西 秀哉 (核融合科学専攻)
- ・ 「研究記録を通じて融合的研究と教育をすすめるための研究会」 3月9日 国立遺伝学研究所 代表 木村 暁 (遺伝学専攻)
- ・ 「文理学術基盤に関する萌芽的研究会」 3月13日 アットビジネスセンター「東京駅」代表 出口 正之 (比較文化学)

萌芽的研究会を開催したら、学融合共同研究としてまとめ、応募することは期待されていますが、義務とはされていません。平成27年度には「動物福祉研究会」のテーマが学融合共同研究に応募し採択されています。

3.2 論文出版補助事業

これまでは総研大の所属を明示した論文の出版を補助していましたが、平成 26 年度からは学生が著者に入っている論文に限定して補助することとしました。これは学生の論文出版を強く推奨するためです。(付録C章参照)

4 全学基盤的事業の拡充

4.1 広報活動

4.1.1 大学ウェブページ

総研大の対外的広報活動の中心となるウェブページは広報社会連携室が運営しています。平成 26 年度には以下の改修を行ないました。

ウェブ広報戦略上の最大のターゲットである受験生の他、幅広いターゲット群にわかりやすく本学の特色・強みが効果的に伝わるよう、視覚的に捉えやすいデザインへの全面改修と複雑化していたナビゲーションの整理を行いました。同時に、カテゴリーを整理しキーコンテンツを再配置することにより、アクセス数の多いページや重要性の高い情報にアクセスしやすくしました。新しいコンテンツでは、イベントカレンダーの導入や研究者紹介のページ追加などにより、在学生や教員に対してもより使いやすくなり、総研大への求心力の醸成に役立つようにしています。レスポンス・ウェブデザインの導入によって、近年増加しているスマートフォンやタブレット端末など表示幅の異なるさまざまな閲覧機器への対応も実現しました。

4.1.2 プレスリリース

広報社会連携室では基盤機関との協力により、総研大生が著者となった論文について、共同のプレスリリースを行なっています。平成 26 年度に行なったものについては付録 C 章参照。この取り組みでは次に述べる広報連絡会によるつながりが重要な役割を果たしています。

4.1.3 広報連絡会

本学を構成する基盤機関の広報担当者（教員と職員）と総研大広報室で構成されており、主に情報共有を目的として設置されています。平成 26 年度には 2 月 20 日に学術総合センターで広報連絡会会合を開催しました。基盤機関広報担当者と総研大広報室は、いくつかの共通目的や共通課題を持っていますが、普段は電話やメールでのやり取りのみであり、担当者同士が直接会う機会は多くありません。そのため、基盤機関の広報担当教職員が顔をつきあわせて各機関広報の持つ問題と過去の事例の情報交換を行うことによって、それぞれの機関の広報事業を発展させることを目的としています。

4.2 本部図書館

本学の本部図書館は葉山キャンパスにあります。図書の管理、貸し出し、リファレンスサービスなどの他に、電子ジャーナルや電子ブックを導入して全学的なサービスを行なっています。平成26年度の購入冊子は紙媒体のもの1103冊に対し電子媒体のものは7759冊でした。

図書館は一般市民にも開放されており、研究資料の収集や学習スペースとしても有効に活用されています。(6.2.2 章参照)。

神奈川県立図書館の出先の機能も有しており、神奈川県立図書館所蔵の図書について、総研大附属図書館を介して、教職員と周辺市民に貸出しを行っています（KLネットサービス）。2014年度より附属図書館を国立国会図書館の窓口として登録する事により、国立国会図書館が所蔵するデジタル資料を本学図書館でも閲覧できるサービスも開始しました。

4.2.1 e-journal

2014年度に契約した電子ジャーナルは以下のようになります。

- Science Direct (174 タイトル)
- Springer Link (1,640 タイトル)
- Wiley Online Library (1,422 タイトル)
- Bio ONE (176 タイトル)
- JSTOR Archive (787 タイトル)

また eBook は Springer eBooks (6,750 冊) があり、論文検索 Data Base System として SCOPUS を提供しました。

4.2.2 SOKENDAI リポジトリ

学位取得論文の他、本学の教員による論文、著書、発表資料等の学術資料のアーカイブズを行い、インターネットで公開しています。内容は学術論文 (1,120タイトル)、学位論文 (2,266タイトル)、著書等 (790 件) です。また、「秋篠宮殿下の鶏コレクションデータベース」「総研大関係新聞記事データベース」等、18 のデータベースを公開しました。

4.3 アーカイブズ

本学の創設に関わる文書の保存、整理、公開を行なっています（総合研究大学院大学創設資料データベース）。また、高エネルギー加速器研究機構、核融合科学研究所、分子科学研究所等、総研大及び基盤機関で行われている4つのアーカイブズデータを一括検索できるデータベースを運営し公開しています。

4.4 情報基盤整備

情報基盤センターでは、葉山キャンパス・横浜データセンターの情報ネットワーク・情報システムを核とした総合研究大学院大学における情報基盤の整備・管理・運用、およびそれに伴う調査、研究開発、教育情報環境の利用支援を行っています。平成26年度の主な活動は以下となります。

■情報サービス 総研大クラウド等の情報基盤を利用し、次の情報サービスの提供を行いました。

- WEB ホスティングサービス
- 転送メールサービス（修了生への生涯メール転送サービスを含む。）
- TELAS@SOKEN（総研大遠隔講義支援システム）
- TV 会議
- 電子メールサービス（メーリングリストの利用を含む。葉山キャンパス限定）

■情報ネットワーク・情報システムの整備

- 情報ネットワークシステム：横浜データセンターおよび葉山キャンパスでの有線 LAN に関わるネットワークスイッチおよびネットワーク監視装置の更新
- ACCESS@SOKEN（学術連携・共同教育支援システム）：主にシンクライアントシステム・教学資料共有ファイルストレージシステム・教学情報共有オンラインポータルシステムで構成される ACCESS@SOKEN の新規導入

■基盤機関・大学共同利用機関等との連携

- TELAS@SOKEN の説明会および ACCESS@SOKEN の導入説明（平成26年9月～10月、20専攻）
- セキュリティ・ワークショップ2014（SWS2014）の開催支援（平成26年12月18日～12月20日、国際日本文化研究センター）

4.5 学生のための賞

平成26年度から、科学者として活躍している修了生の研究を顕彰することを目的とした「総研大科学者賞」と、科学者を志す在学生の研究の奨励を目的とした「総研大未来科学者賞」を新設しました。また、在校生の優れた業績に対して送られる長倉賞は毎年、選考、授賞しています。

■総研大科学者賞　すぐれた修了生に授賞するものであり、平成 26 年度から始められました。第 1 回は研究内容を中心に国際性、学際性、社会性について総合的に判断した結果、中央大学大学院教授の中村真氏（加速器科学専攻、平成 13 年 3 月修了）に授賞されました。幅広い研究分野と国内外の研究所を渉猟し自分流の学問を作り上げてきた中村氏は、学際性、国際性、社会性という総研大の理念を体現しており受賞に値すると評価されたものです。

平成 27 年 4 月 6 日（月）の入学式の機会に授賞式が行なわれ、新入生を前に講演いただきました。

■総研大未来科学者賞　次の 3 名の学生が選考され平成 27 年 4 月 6 日（月）の入学式の機会に授賞式が行なわれました。

- ・ 黄 昱（文化科学研究科日本文学研究専攻）「『徒然草』の漢籍受容と漢訳—文学におけるオリジナリティの創出について—」
- ・ 嶋川 里澄（物理科学研究科天文科学専攻）「銀河形成への環境効果：渦巻銀河と楕円銀河はいつどのように分化したか？」
- ・ 中沢 信吾（生命科学研究科遺伝学専攻）「新生仔大脳皮質における入力依存的なバレル神経回路発達機構の解析」

■総合研究大学院大学研究賞　同年度の修了生の中から選考される賞です。

- ・ SAUCEDO SEGAMI Daniel Dante 文化科学研究科比較文化学専攻 「「私のワカ」パブリック考古学から見た現代ペルーにおける考古遺産の活用」
- ・ Mathieu OMET 高エネルギー加速器科学研究科加速器科学専攻 「国際リニアコライダーのためのデジタル低電力高周波源の制御」
- ・ 西村 俊哉 生命科学研究科基礎生物学専攻 「メダカを用いた生殖細胞の性の研究」

■長倉研究奨励賞　初代学長である長倉三郎先生のご寄付によって開始された賞で、平成 26 年度には第 20 回の受賞となりました。本年度は次の 2 名の方が受賞されました。

- ・ 片岡 章雅 物理科学研究科天文科学専攻 「惑星形成初期におけるダスト進化理論の構築と観測による検証可能性」
- ・ 田淵 紗和子 生命科学研究科生理科学専攻 「オレキシン神経の時期特異的運命制御によるナルコレプシー症状発現メカニズムの解明」

4.6 修了生ネットワーク

総研大科学者賞のように修了生を対象とする賞を設けるなど、総研大コミュニティーを構築するための活動もさまざまに行われています。

■修了生同窓ネットワーク（Anet） 総研大修了生を中心に、教職員、在学生、教員 OB など総研大コミュニティの方をメンバーとする学術文化交流ネットワーク「総研大同窓ネットワーク」SOKENDAI Alumni Network を運営しています。入口となるページをリニューアルしました。（<https://soken-anet.soken.ac.jp>）（名称は「総研大学術交流ネットワーク」から「総研大同窓ネットワーク SOKENDAI Alumni Network」に変更しました。略称も SOKENDAI-Anet に変更しました。）

■学術交流会 総研大教職員・在学生・修了生・名誉教授等から構成されるコミュニティメンバーと各専攻基盤機関のさらなる連携を目指す学術交流ネットワークの強化に向けて、開催中に実施する学術講演会や学術交流フォーラム等の企画を通じて、総研大におけるサイエンスフロンティアについて理解を深め、学術交流の推進を図ることを目的に開催されました。

3月23日（月） - 24日（火）に学位記授与式、長倉賞選考会と重ねて行われました。

- 23日（月）
 - 第20回長倉賞候補者発表会 「わが研究成果」
 - 新修了生のポスタープレゼンテーション
 - 懇親会
- 24日（火）
 - 第20回長倉賞授賞式
 - 本学修了生による学術講演会 「総研大修了後の研究歴・現在の研究について」
 - * 堀 まどか（嶺南大学校 外国人教員 / 2008年 国際日本研究専攻修了）【「文化相対主義」の日本？ —韓国で教える現場から】
 - * 西原 康師（岡山大学 教授 / 1997年 機能分子科学専攻修了）【クロスカップリング反応を利用した有機合成・材料科学】
 - * 山本 麻希（長岡技術科学大学 准教授 / 2001年 極域科学専攻修了）【野生動物と人間の共存に向けて】
 - * 古瀬 幹夫（生理科学研究所 教授 / 1995年 生理科学専攻修了）【細胞シートの漏れを防ぐ細胞接着の分子機構】
 - * Tai Renzhong (Shanghai Institute of Applied Physics 教授 / 1999年 放射光科学専攻修了) 【SSRF current and future : Opportunity and challenge】
 - * 田嶋 敦（金沢大学 教授 / 2001年 生命体科学専攻修了）【ゲノムからみるヒトの多様

5 国際連携

5.1 アジアの大学との交流 (日本留学フェア等)

平成 26 年度には、新たに設けられた国際連携担当理事を中心に、アジアの各地で開催された日本留学フェア等に参加するとともに、現地の修了生との交流、修了生を介しての現地大学・研究機関との交流などの活動を行いました。

5.1.1 台湾の大学・研究所

7 月 18 日から 7 月 22 日まで、田村理事 (評価・国際連携担当) をはじめとし、三原智教授 (素粒子原子核専攻)、伊藤憲二准教授 (生命共生体進化学専攻)、標葉隆馬助教 (生命共生体進化学専攻)、他事務職員 2 名の計 6 名が台湾を訪問し、国立台湾大学の訪問、本学修了生との懇談、高雄および台北で開催された日本留学フェアに参加する等、現地での広報活動・国際交流活動を行いました。

また、国立台湾大学、中央研究院天文及天体物理研究所を訪問し、修了生や現地の研究者と連携を深めるための意見交換を行いました。

5.1.2 ミャンマー、タイの大学

8 月 27 日から 9 月 3 日まで、田村克己理事 (評価・国際連携担当) をはじめとし、蟻川謙太郎教授 (生命共生体進化学専攻)、三原智教授 (素粒子原子核専攻)、木村誠宏准教授 (加速器科学専攻)、他事務職員 3 名の計 7 名がミャンマー、タイを訪問し、日本留学フェアに参加するとともに、現地での広報活動・国際交流活動を行いました。

ミャンマーでは、ヤンゴン大学、ヤンゴン工科大学、JICA(独立行政法人国際協力機構ミャンマー事務所) や MAJA(Myanmar Association of Japan Alumni) 等を訪問しました。

タイでは、日本留学フェア (バンコク) での大学ブース出展に参加したほか、タイ在住の修了生を招いての懇談会、チュラロンコーン大学理学部、カセサート大学理学部などの協定校、修了生のいる King Mongkut's Institute of Technology Ladkrabang 情報学部を訪問、研究室訪問を行いました。

また木村准教授は Chiang Mai University, Mahasarakham University, Rajamangala University of Technology を訪問、現地の研究者と情報交換を行いました。

5.1.3 ベトナムの大学、研究所

平成 26 年 11 月 13 日から 18 日まで、田村克己理事 (評価・国際連携担当) をはじめとし、三原智教授 (素粒子原子核専攻)、田村隆幸助教 (宇宙科学専攻)、他事務職員 3 名の計 6 名がベトナムを訪問し、日本留学フェアに参加する等、現地での国際連携・広報活動を行いました。

ハノイでは、修了生の Pham Hong Minh 博士の手配により Institute of Physics (IOP), Vietnam Academy of Science and Technology (VAST)(ベトナム科学技術院 物理研究所) を訪問しました。

ホーチミンでは、University of Science, Vietnam National University-HCMC(ベトナム国家 大学 自然科学大学校ホーチミン市校) と IOP-VAST(HCMC) (ベトナム科学技術院物理研究所ホーチミン市支部) を訪問しました。11月15日、16日は、日本留学フェアでのブース出展に参加しました。

5.1.4 ドイツ・オーストリア

11月25日～30日、永山國昭理事と事務職員1名がウイーン大学、Max Planck Administrative Headquarter (ミュンヘン) を訪問し、総研大修了生および現地の研究者と交流しました。

5.1.5 マレーシア・シンガポールの大学

平成26年11月28日から12月3日まで、田村理事(評価・国際連携担当)をはじめとし、三原智教授(素粒子原子核専攻)、伊藤憲二准教授(生命共生体進化学専攻)、武藤彩助教(遺伝学専攻)、他事務職員3名の計7名がマレーシア・シンガポールを訪問し国際教育展に参加する等、現地での広報活動・国際交流活動を行いました。

国際教育展は、マレーシアの留学希望者及び進学指導者等を対象に、マレーシア内外、世界各国の教育関係者が情報提供を行うもので、日本からは本学を含む42の教育機関が参加し、日本パビリオンで各自自校のPRを行いました。

また、マレーシアおよびシンガポールで、在住の共同研究者、修了生を招いた懇談会を開催しました。

5.2 総研大-UST 共同セミナー

科学技術連合大学院大学校 (University of Science and Technology) は韓国のテジョン (大田、Daejeon) に本部を置く、新しい大学です。(2004年3月開校 <http://www.ust.ac.kr/>)。韓国文部科学省 (Ministry of Education, Science and Technology) に属する研究所を中心とし、その他の省庁に属する研究所も参加して作った大学院大学で、総研大と良く似ています。

平成25年夏にUSTの学長Lee, Un Woo (李 銀雨)博士が本学を訪問した際、当時の高畑学長と両大学の協力によるセミナーの開催について合意がなされ、学融合推進センター桑島教授を中心にアイデアが検討されました。

平成26年度の実施は7月29日(火)～8月1日(金)に総研大レクチャー「計算科学」(2単位)として行なわれ、総研大側から6コマの講義、UST側から8コマの講義が行なわれたほか、ポスター発表、全体討論、UST研究室訪問などが行なわれました。

日本側から7名の総研大生(情報科学専攻4名、統計科学専攻1名、核融合科学専攻1名、天文科学専攻1名)と、韓国側からは、USTやKAISTの学生と研究所のポストドクなど約60名で、総数70名ほどの参加がありました。

講師陣は、日本からは、天文科学専攻の富阪教授、機能分子科学専攻の斉藤教授、構造分子科学専攻の奥村准教授、核融合科学専攻の三浦准教授に加えて、学外から横浜市立大の木寺教授（生物物理学）と筑波大の石山博士（天文科学）の6名、韓国側からは、UST 傘下の研究所や外部の研究所から、天文科学、核融合科学、物質科学、計算科学、生物情報学などの分野の、8名の講師でした。各講師は講義の最後にレポート課題を示し、学生は2名の講師を選んでレポートを提出しました。総研大生の成績は、セミナーへの参加状況と提出されたレポートにより評価されました。セミナーは、朝8時半から（初日は9時から）夕方6時過ぎまで、90分の講義が5つ続くという、かなりタイトなものでしたが、総研大生は全員全ての講義に出席、レポートを提出してAの成績を取めました。セミナーでは、参加学生によるポスター発表も実施され、セミナー講師が審査員となって優秀なポスターが選ばれ、最終日の午後、ポスター賞の表彰が行われました。総研大・統計科学専攻の MD.Ashad Alam 君と UST (KRISS Campus) の Min Kyu Park 君がグランプリ賞、総研大・統計科学専攻の Ruijian An 君と Feng Jin Gyun 君、UST (Kier Campus) の Kashif Rashid 君と KAIST の Han Seul Kim さんが一等賞の表彰を受けました。

平成27年度には学融合レクチャー「ビッグデータと計算科学ワークショップ」として11月26日（木）～28日（土）に葉山で開催されました。

5.3 ベトナム科学技術アカデミーの訪問

1月20-21日には Vietnam Academy of Science and Technology (VAST) からの視察団4名が総研大を訪問、総研大との交流拡大に向けて意見交換を行ないました。その後は学融合推進センターや先導科学研究科の見学を行いました。

訪問者：

- Prof. Duong Ngoc Hai - Vice-President of VAST, Director of GUST, VAST.
- Prof. Le Hong Khiem - Dir. of Institute of Physics, VAST.
- Dr. Nguyen Tien Dat - Deputy Director of GUST, VAST.
- Mr. Dang Viet Tien - Deputy Director of Human Resources Department, VAST.

ここで GUST は Graduate University of Science and Technology のことです。

5.4 JSPS サマープログラム

総研大と日本学術振興会が毎年共催で行う事業であり、米国 (NSF)、英国 (British Council)、フランス (CNRS)、ドイツ (DAAD)、カナダ (Canadian Embassy) に加えて本年度からはスウェーデン (STINT, the Swedish Foundation for International Cooperation in Research and Higher Education) も参加することとなりました。

- 6月11日 開講式、Joint Staff Meeting およびレセプション（レセプションには天皇、皇后両陛下が来訪され、フェローと歓談されました）。
- 6月12日 特別授業1, 特別授業2, および日本語授業
- 6月13日 日本語授業、ポスターセッション（参加者全員が研究テーマを発表）のあとホームステイ（葉山近隣のボランティアによる）（13日夕刻ー15日夕刻）
- 6月16日 日本語授業および特別授業3
- 6月17日 受け入れ機関に出発
- 8月19日 報告会、送別会（ホテルグランドパレス）

■総研大レクチャー「国際コミュニケーション」 JSPS サマープログラムに併設して総研大レクチャー「国際コミュニケーション」が行なわれました。2.2.1 参照。総研大生に英語によるポスタープレゼンテーションの実践的知識をさずけるもので、レセプション、講義およびポスターセッションに JSPS サマープログラム参加フェローと共に参加します。総研大レクチャーとして毎年開講しているものです。

- 6月11日 英語研修（5時間）・JSPS フェローとの交流レセプション
- 6月12日 英語研修（4時間）・JSPS 特別講義（上述）・日本文化紹介
- 6月13日 英語研修（3時間）・JSPS ポスターセッションに参加

平成26年度の参加者は留学生3名を含む総研大生10名でした。

5.5 アジア冬の学校

本事業は、学融合推進センター教育事業の次世代研究者育成教育プログラムに応募して採択されたもので、物理科学研究科の各専攻の連携の下、集中講義を実施することで、総合研究大学院大学で行われているレベルの高い研究・教育内容を広く総研大以外の大学院生や若手研究者の教育に活用することを目的としています。特に、聴講者の範囲を国内に限定することなく、アジア全域にまで幅広く広げることを目指し、アジア全体での若手ネットワーク構築や総研大への編入学希望者への情報提供を視野に入れて実行されます。

《機能分子科学専攻／構造分子科学専攻》

分子研および総研大機能・構造分子科学専攻で行っている研究・教育活動をアジア諸国の大学生・大学院生および若手研究者の育成に広く供することを目的として平成16年度に始まり、今回で11回目になります。今年度は平成27年1月13日（火）から17日（金）にかけて岡崎コンファレンスセンターにおいて開催しました。海外からの応募者は49名あり、これを書類選考で絞り込み、15名を受け入れました。その国籍別の内訳はタイ13名、中国1名、ベトナム1名です。また、IIP（IMS 国際インターンシッププログラム）の留学生が6名、および Asia CORE Program（分子科学アジアコア多国間国際共同事業）の参加者30名、日本国内からの参加者が42名あり、講師を除く参加者は合計93名でした。

《核融合科学専攻》

核融合科学専攻は平成 26 年 12 月 2 日 (火) から 5 日 (金) まで、核融合科学研究所 (NIFS) において開催しました。海外からの応募者は 90 名あり、中国 3 名、韓国 1 名、インド 1 名、台湾 2 名、インドネシア 2 名、ネパール 2 名、タイ 1 名、フランス 2 名、イタリア、オーストリア、ロシア、ウクライナから各 1 名の合計 18 名を受け入れました。また、国内からは 13 名 (総研大核融合科学専攻 2 名、核融合科学研究所 COE 研究員 1 名を含む) の参加がありました。

《天文科学専攻》

電波天文冬の学校を、平成 27 年 2 月 10 日～13 日に総研大天文科学専攻と韓国 UST (科学技術連合大学院大学) と共同で開催しました。本事業は、韓国の KVN (Korean VLBI Network) の 21m 電波望遠鏡の一つが設置されている済州島の大明リゾートで開催され、総勢で 55 名の学生の参加がありました。当初は東アジア地域を対象として 40 名程度の規模を想定していましたが、東南アジア地域からの参加希望者が多数いたことを受けて、最終的に 60 名規模に拡大しました。参加者の内訳は以下です。日本 14 名、韓国 14 名、中国 6 名、台湾 2 名、フィリピン 2 名、タイ 4 名、ベトナム 3 名、マレーシア 2 名、インドネシア 5 名、インド 1 名、ナイジェリア 1 名、英国 1 名。(他にモンゴル 2 名を予定していましたがビザの関係で残念ながら直前でキャンセルとなりました)。総研大関係者としては、2015 年本学入学予定者が 1 名生徒として、また、本学博士後期課程在学学生 1 名が世話人の一人として参加しました。また、後述する日本人講師 6 名の内、4 名が現在の総研大教官であり、2 名が総研大終了生でした。

《宇宙科学専攻》

宇宙科学専攻では、平成 27 年 1 月 19 日～21 日にかけて、相模原キャンパスを中心に開催しました。応募者数は、海外から 76 人、国内から 2 人 (内 1 名は外国籍) であり、選抜後、参加者は 18 人を受け入れたものです。参加者の内訳は、インド 2 名、インドネシア 4 名、中国 5 名、パキスタン 2 名、ベトナム 1 名、マレーシア 2 名、日本 (学外) 1 名。全 18 名 (内、日本在住者 2 名) でした。

5.6 体験留学プログラム

本事業は、学融合推進センター教育事業の国際的リーダー育成プログラムに応募して採択されたものです。海外の優秀な大学生及び修士学生を生命科学研究科の各専攻に数週間招待し、ホスト研究室における研究や、セミナー、勉強会等に参加してもらう事により、総研大生との緊密な交流を図り、国際性豊かな人材の育成に寄与することが期待されています。今年度は 14 カ国から 24 名が参加しました。(代表：遺伝学専攻准教授 鈴木 えみ子)

5.7 海外学生派遣事業

国際的に通用する研究者の育成を目的として、国際共同研究活動および国際的研究能力育成に資するプログラムに参加する本学学生に対して、参加に必要な経費を支援することを目的とする事業です。平成26年度は以下のように支援を行いました。

以下、所属専攻、派遣学生氏名、滞在日程、受入機関です。

- 素粒子原子核専攻、嶋田 健悟、10月6日-11月4日、École Polytechnique Fédérale de Lausanne
- 情報学専攻、SHI SHUYU、7月1日-12月31日、Yale University
- 統計科学専攻、金川 元信、10月19日-11月30日、University College London
- 遺伝学専攻、BABARINDE ISAAC ADEYEMI、7月21日-9月21日、University of Michigan
- 基礎生物学専攻、LI CHEN、8月11日-9月21日および10月11日-11月20日、Institute of Plant and Microbial Biology, Academia Sinica

5.8 若手教員海外派遣事業

本学の教育研究の中核を担う国際的視野に富む教員を養成するため、優れた若手教員を海外へ派遣し、海外の大学・研究機関等において調査研究活動に従事できるよう支援します。本事業を通じて本学の教員の教育研究能力及び国際的通用性等の向上を図るとともに、総研大国際ネットワークの構築に資することを目的とするものです。（基盤機関において在外研究員派遣制度が廃止された際に、総研大として措置された特別経費にてカバーする、という議論があったため、平成26年度までは本学教員以外の基盤機関教員も支援対象となっていました。）

- 国立歴史民俗博物館（日本歴史研究専攻）山田 慎也 准教授「台湾における葬儀教育と近代化に関する研究」平成26年7月31日～9月30日 天主教輔仁大学
- 核融合科学研究所 鈴木 千尋 助教「プラズマ中の重元素多価イオンからの極端紫外スペクトルに関する研究」平成26年5月31日～5月31日 ユニバーシティカレッジダブリン／マックスプランク・プラズマ物理研究所／イエナ大学
- 核融合科学研究所（核融合科学専攻）芦川 直子 助教「低放射化フェライト鋼の水素リテンションに関する研究」平成26年10月26日～1月31日 マックスプランク・プラズマ物理研究所
- 核融合科学研究所（核融合科学専攻）佐竹 真介 准教授「新古典輸送コードの様々なヘリカル装置への適用に関する共同研究」平成26年6月1日～7月13日 国立核融合研究所 (EURATOM-CIEMAT) / Max-Planck プラズマ物理研究所 (IPP-Garching)
- 核融合科学研究所 池田 勝則 助教「RF 水素負イオン源における水素負イオンの引き出し機構

- の研究」平成 26 年 5 月 19 日～11 月 30 日 マックスプランク・プラズマ物理研究所
- 国立情報学研究所（情報学専攻） 福田 健介 准教授「DNS トラフィック解析に関する研究」平成 26 年 8 月 31 日～平成 27 年 1 月 30 日 南カリフォルニア大学・情報科学研究所
- 素粒子原子核研究所（素粒子原子核専攻） 郡 和範 准教授「素粒子物理学に基づくインフレーション宇宙論（素粒子的宇宙物理学）に関する研究」平成 26 年 8 月 1 日～9 月 1 日 Lancaster University/Chicago University
- 素粒子原子核研究所（素粒子原子核専攻） 田窪 洋介 助教「ATLAS 実験 IBL 検出器の導入に向けた研究開発」平成 26 年 4 月 1 日～12 月 25 日 CERN / フェルミ研究所 / サリー大学
- 宇宙科学研究所（宇宙科学専攻）大槻 真嗣 助教「極限環境移動のためのローバの制御に関する研究」平成 26 年 5 月 12 日～平成 27 年 1 月 30 日 米国航空宇宙局ジェット推進研究所 / 国際会議 i-SAIRAS

5.9 国際研究集会開催支援事業

本学が専攻を置く基盤機関または専攻が主催する国際研究集会（国際シンポジウム、国際フォーラム、国際セミナー等）に対し、一定の要件のもと開催経費の一部を支援するものです。本年度には以下の事業が採択されました。

- 文化科学研究科 日本文学研究専攻 山下 則子 教授「第 38 回国際日本文学研究集会」平成 26 年 11 月 29 日～11 月 30 日 国文学研究資料館
- 物理科学研究科 核融合科学専攻 山田 弘司 教授「第 24 回国際土岐コンファランス - 相互促進によって拡大するプラズマおよび核融合科学の地平」平成 26 年 11 月 4 日～11 月 7 日セラトピア 土岐（岐阜県・土岐市）
- 物理科学研究科 天文科学専攻 本間 希樹 教授「UST-GUAS Radio Astronomy Winter School 2015」平成 27 年 2 月 10 日～2 月 13 日 韓国済州島大明リゾート
- 複合科学研究科 統計科学専攻 金藤 浩司 教授「ISM シンポジウム（環境統計に関する）」平成 27 年 2 月 24 日 統計数理研究所
- 先導科学研究科 生命共生体進化学専攻 颯田 葉子 教授「MHC の進化と人類進化」平成 26 年 7 月 26 日～7 月 27 日 総合研究大学院大学学融合推進センター（葉山）
- 先導科学研究科 生命共生体進化学専攻 佐々木 顕 教授「Summer Workshop on Theoretical Biology at Hayama」平成 26 年 8 月 4 日～8 月 5 日 総合研究大学院大学先導科学研究科（葉山）

5.10 海外学生・研究者招聘プログラム

海外の学生および研究者を短期間、本学に招聘し、国際共同研究を行うものです。

- 天文科学専攻 富阪 幸治 教授「天文科学海外インターン招聘プログラム」平成 26 年 10 月～平成 27 年 3 月（国立天文台）
- 宇宙科学専攻 松原 英雄 教授「激動期宇宙の国際共同研究を通じた若手研究者育成プログラム」平成 26 年 10 月 20 日～11 月 29 日(JAXA・宇宙科学研究所・相模原キャンパス)
- 統計科学専攻 庄 建倉 准教授「断層形状と震源機構の影響を含める高精度な地震活動の統計モデルの開発 (Developing high-resolution statistical models of seismicity by incorporating the influence from fault geometry and earthquake focal mechanisms)」平成 26 年 11 月 1 日～12 月 31 日（統計数理研究所）
- 基礎生物学専攻 長谷部 光泰 教授「食虫植物ゲノム解読大学院生国際共同プログラム」平成 26 年 12 月 11 日～19 日(基礎生物学研究所)
- 遺伝学専攻 深川竜郎 教授「遺伝学専攻 IGP 入試受験者を対象とした体験入学事業」平成 27 年 2 月 15 日～18 日(遺伝学研究所)
- 生命共生体進化学専攻 蟻川謙太郎 教授「神経行動学研究のための基盤的技術実習」平成 26 年 9 月 26 日～10 月 24 日(葉山キャンパス)

6 社会貢献・社会連携

6.1 学校教育への協力：横高アカデミア

地元の県立横須賀高校に協力して総研大の教員が高校生に講義を行いました。「横高アカデミア 1st Phase」と呼ばれているものです。

総合研究大学院大学（湘南国際村）との 1 年生用の教育連携事業。多彩な研究分野における総合研究大学院大学の先生方による講義（年 8 回）。「各回出される課題をグループごとに協議」→実際の「講義の受講」→最後に「振り返り」を通して、知的探究心を育てることを目標としています。年度末には論文(エッセイ)を提出します。(横須賀高校ホームページより。)

平成 26 年度には以下の講義がおこなわれました。

5 月 7 日 前学長 高畑尚之「宇宙と生命、そして私たち」

7 月 9 日 学融合推進センター長・先導科学研究科教授 平田光司「重要な問題なのに科学では

答えられない科学の問題」

- 7月18日 広報室長 眞山聡「巨大観測装置すばるとアルマ望遠鏡による惑星研究」
- 10月3日 先端科学研究科教授 颯田葉子「人類への進化と疾患」
- 10月22日 前副学長 長野泰彦「人は色をどのように認識しているのか？」
- 11月19日 学融合推進センター特任教授 桑島 邦博「たんぱく質のかたちができる仕組みを探る」
- 12月17日 理事 永山國昭「見えないものを見るー私の顕微鏡開発ー」
- 1月21日 学長 岡田泰伸「みなさんのからだを構成している細胞において、クロライドイオンはどんな働きをしているのか？」

6.2 地域貢献

6.2.1 講演会開催など

■湘南国際村フェスティバル2014 日程：平成26年5月3日（土・祝）

- ・講演会「アフリカ古代湖の魚が見ている世界、現地調査と最新研究」

講師：寺井洋平（生命共生体進化学専攻助教）

場所：葉山キャンパス 2F 講義室

時間：14:00～15:50

参加者：53名

- ・サイエンスカフェ

1 中村佳代（生理科学専攻学生）「脳の病気によって起こる手足の麻痺をよくしたい！」

2 武居雅子（日本文学研究専攻学生）「文学と香道」

3 泉田賢一（素粒子原子核専攻修了生）「広がるニュートリノビームー T2K 実験の次世代拡張を考えるー」

場所：葉山キャンパス IF テラス四季

時間：16:00～18:00

参加者：43名

- ・観望会「春の夜空を楽しもう」

時間：18:30～20:00

参加者：41名

■サイエンスカフェ「酵母から見てきたオートファジーの世界」 かながわ国際交流財団湘南国際村学術研究センターとの共催（葉山町後援）で行っています。

講師：大隅良典（総合研究大学院大学名誉教授／基礎生物学研究所名誉教授・東京工業大学統合研究院フロンティア研究機構特任教授）

場所：湘南国際村センター国際会難場（湘南国際村センター主催、総研大協力）

日程：平成26年7月5日（土）

時間：14:00～16:00

参加者：54名

■サイエンスカフェ「進化がヒトに残したもの～人間行動進化学への招待～」 総研大主催のイベントとして毎年開催しています。

講師：大槻久（先導科学研究科助教）

場所：理科ハウス（逗子市）

日程：平成27年2月1日開催

時間：14:00～16:00

定員：23名

■中高生のための科学セミナー「日本の宇宙科学のいまとこれから」 横須賀市教育委員会の後援で毎年開催しています。

講師：坂本成一（宇宙科学専攻教授）

場所：横須賀市自然・人文博物館 講座室

日程：平成26年7月29日（火）

時間：14:00～16:00

参加者：76名

■先導科学研究科学術講演会

長谷川克（先導科学研究科）「ツバメの恋情を解き明かす-多彩な好みと形質進化」

八島健太（先導科学研究科）「首都圏を襲うインフルエンザ どの駅、どの路線が危ないの？」

場所：学融合推進センター1階

日程：平成26年11月3日 10:00～12:00

参加者：約100人

6.2.2 本部図書館の利用

本部図書館は近隣住民の利用（貸し出しを含む）を許可しています。また、神奈川県立図書館の出先の機能も有しており、神奈川県立図書館所蔵の図書について、総研大附属図書館を介して、教職員と周辺市民に貸出しを行っています（KLネットサービス）。平成26年度の利用は申込64件、貸出11件でした。

付録 A 平成26年度行事日程

4月7日	春期入学式、学長賞授与式
4月7-10日	春期フレッシュマンウイーク (2.1.1 章参照)
5月3日	湘南国際村フェスティバル 2014
6月11-16日	JSPS サマープログラム開校式およびオリエンテーション
6月24日	学融合推進センター公募型研究事業募集開始 (締め切りは8月8日)
7月5日	湘南国際村アカデミア・サイエンスカフェ「酵母からみえてきたオートファジーの世界」
7月18-22日	国際連携活動 台湾訪問 (5 章参照)
7月29日	中高生のための科学セミナー「日本の宇宙科学のいまとこれから」
7月29日-8月1日	UST-総研大「計算科学」共同セミナー (韓国テジョン市) (5.2 章参照)
8月19日	JSPS サマープログラム報告会 (ホテルグランドパレス)
8月25日	新規研究課題ヒアリングおよび採択 (学融合推進センター運営委員会)
8月27日-9月3日	国際連携活動 ミャンマー・タイ (5 章参照)
9月9日	第1回葉山セミナー 伏見譲氏 (学長補佐)「生体高分子の進化能とその進化」
9月29日	秋期学位記授与式
10月7日	秋期入学式
10月7-10日	秋期フレッシュマンウイーク
10月15日	JSPS サマー・プログラム 2015 連絡協議会 (麹町)
11月3日	第17回先導科学研究科・学術講演会 (2.1.3 章参照)
11月13-18日	国際連携活動 ベトナム (5 章参照)
11月22日	大学共同利用機関シンポジウム 2014 参加
11月28日-12月3日	国際連携活動 マレーシア・シンガポール (5 章参照)
12月3日	27年度公募型教育事業募集開始
1月15-16日	公開研究報告会 (葉山)
1月21-22日	ベトナム科学技術アカデミー葉山訪問 (5 章参照)
1月23日	学生セミナー委員全体会議 (品川)
2月1日	サイエンスカフェ「進化がヒトに残したもの～人間行動進化学への招待～」
2月20日	総研大広報連絡会会合 (竹橋)
2月25日	平成27年度学融合レクチャー (学融合教育事業) ヒアリングおよび採択
3月23日	長倉賞・総研大賞発表会・授賞式、学術交流会
3月24日	春期学位記授与式

付録 B 役員、特任教員の研究業績

総研大の他の報告書に掲載されているものは除いている。

■学長 岡田泰伸

- T. Akita & Y. Okada (2014) Characteristics and roles of the volume-sensitive outwardly rectifying (VSOR) anion channel in the central nervous system. *Neuroscience* 275, 211-231 (2014年9月5日)
- 岡田泰伸 (2014) OPINION : バックグラウンドからフォアフロントへ: 細胞生死と生体恒常性に関わるセンサーチャネル (後編その1). *日本生理学雑誌* 76, 115-120 (2014年5月)
- 岡田泰伸 (2014) OPINION : バックグラウンドからフォアフロントへ: 細胞生死と生体恒常性に関わるセンサーチャネル (後編その2). *日本生理学雑誌* 76, 167-170 (2014年9月)

■学長補佐 伏見讓

- Husimi Y., Defining Life from the Evolvability Viewpoint, *Viva Origino*, 42, 38-41 (2014年)
- 秩序と無秩序を繋ぐ時間—生物の場合、伏見讓、*数理科学* 53 :1, 20-25 (2015年1月)

付録 C 学生の論文等の業績

本学学生を著者に含む2014年に発表された論文等のなかから、プレスリリース((4.1.2章参照))を行ったもの、論文出版補助((3.2章参照))の対象となったもの、Yasu通信での学長の呼びかけ(平成27年6月)に応じて情報が寄せられたものを掲載します。このため網羅的なものではありません。

学生の所属専攻、氏名、題名、ジャーナル等の名称のみです。

■プレスリリースを行なったもの

- 極域科学専攻 安達大輝「The foraging benefits of being fat in a highly migratory marine mammal」*Proceedings of the Royal Society B* 11月5日
- 極域科学専攻 佐藤和敏「Predictability of the Barents Sea ice in early winter: Remote effects of oceanic and atmospheric thermal conditions from the North Atlantic」*Journal of Climate* 9月23日
- 基礎生物学専攻 佐々木武馬「Shoot-derived cytokinins systemically regulate root nodulation」*Nature Communications* 2014年9月19日号
- 極域科学専攻 佐藤和敏「Influence of the Gulf Stream on the Barents Sea ice retreat and Eurasian coldness during early winter」*Environmental Research Letters*、2014年8月15日オンライン掲載

■論文出版補助を受けたもの

- 情報学専攻 Saran Tarnoi“QoS-aware routing for heterogeneous layered unicast transmissions in wireless mesh networks with cooperative network coding” *EURASIP Journal on Wireless Communications and Networking*
- 生理科学専攻 大川都史香 “Identification and Characterization of GABA Receptor Autoantibodies in Autoimmune Encephalitis” *The Journal of Neuroscience*
- 天文科学専攻 MIN CHEULHONG “Acurate parallax measurement toward the symbiotic star R Aquarii” *Publications of the Astronomical Society of Japan* (日本天文学会欧文誌)
- 情報学専攻 町田史門「SNSにおけるセンシティブデータの漏洩検知に基づく公開範囲の設定方式」*情報処理学会論文誌*
- 極域科学専攻 松田貴嗣“New statistical analysis of the horizontal phase velocity distribution of gravity waves observed by airglow imaging” *Journal of Geophysical Research Atmospheres*
- 生命共生体進化学専攻 川嶋彩夏“Substrate-Dependent Evolution of Cytochrome P450 : Rapid Turnover of the Detoxification-Type and Conservation of the Biosyntehsis-Type” *PLoS one*

- 基礎生物学専攻 WANGLAR Chimwar “Tbx protein level critical for clock-mediated somite positioning is regulated through interaction between Tbx and Ripply” PLoS one
- 遺伝学専攻 岩田亮平 “RacGAP alpha-chimaerin function in development adjusts cognitive ability in adulthood” Cell Reports
- 情報学専攻 Hoang-Quoc NGUYEN-SON “Anonymizing Personal Text Messages Posted in Online Social Networks and Detecting Disclosures of Personal Information” IEICE TRANSACTIONS on Information and Systems
- 生理科学専攻 Erkin Kurganov “Heat and AITC activate green anole TRPA1 in a membrane-delimited manner” European Journal of Physiology
- 基礎生物学専攻 福島健児 “Oriented cell division shapes carnivorous pitcher leaves of *Sarracenia purpurea*” Nature Communications.

■ Yasu 通信に情報の寄せられたもの

- 地域文化学専攻
 - 今井彬暁 「つながりを創る行商活動：ベトナムの観光地サパにおける少数民族行商人女性と国外観光客のあいだの互酬的關係」 総研大文化科学研究 第 10 号
- 国際日本研究専攻
 - 宇佐美智之 「第 7 章 中央アジアの地勢とダブシア城周辺の地形・遺跡分布」 『ダブシア城—中央アジア・シルクロードにおけるソグド都市の調査—』 (宇野隆夫、バルディムロドフ・アムリディン編) 真陽社、pp. 275 – 289、2013 年 11 月
 - 簡中昊 「日治初期警察官眼中的台湾原住民形象 ——以〈生蕃探險記〉為例」 『台湾文学研究』 (台南：国立成功大学、2014 年 6 月、195~228 頁) (中国語)
 - 簡中昊 「近代日本の台湾原住民に関する二元的思考の提起—宇野浩二『揺籃の唄の思ひ出』を例にして—」 『総研大 文化科学研究』 (神奈川：総合研究大学院大学、2015 年 3 月、71~84 頁) (日本語)
 - 光平有希 「『医療音楽』にみるリチャード・ブラウンの音楽療法思想」 『総研大文化科学研究』 第 10 号、2014 年 3 月、251-271 頁。
 - 小泉友則 「「子どもの性」に関する観念の歴史の変容—近代化前後の日本を事例に—」 『女性学年報』 第 35 号、日本女性学研究会、2014 年 11 月、27~62 頁。
 - 西田彰一 「キリスト教ナショナリズムと内務官僚としての南原繁 — 赤江達也著『「紙上の教会」と日本近代 — 無教会キリスト教の歴史社会学』 (岩波書店、2013 年) を読んで —」 『社会システム』. 28 号
 - 西田彰一 「宗教ナショナリズムと南原繁」 立命館大学人文科学研究所紀要』 97 号
 - 栄元 「メディアと戦後日本民主主義—『朝日新聞』の社説をめぐって」 日本問題研究 2014 年 01
 - 栄元 「『満洲日日新聞』の創刊と初代社長森山守次」 Intelligence 第 15 号
 - 栄元 「租借地都市大連における『満洲日日新聞』の役割に関する一考察 — 「大連彩票」の内容分析から」 総研大文化科学研究 第 11 号
- 構造分子化学専攻
 - 橋谷田俊 「Local Optical Activity in Achiral Two-Dimensional Gold Nanostructures」 The

- Journal of Physical Chemistry C 118(38) 22229-22233
- 橋谷田俊「Nanoscopic Study on Developing Optical Activity with Increasing Chirality for Two-Dimensional Metal Nanostructures」The Journal of Physical Chemistry C 118(38)
 - 橋谷田俊「2次元金属ナノ構造体を示す強い局所光学活性：近接場円二色性イメージング」表面科学 35(6)
 - 機能分子科学専攻
 - Arunima Sikdar「Crystal structure of archaeal homolog of proteasome-assembly chaperone PbaA」Biochemical and Biophysical Research Communications, 453(3)
 - Tong Zhu「Structural insight into substrate recognition by the endoplasmic reticulum folding-sensor enzyme: crystal structure of third thioredoxin-like domain of UDP-glucose:glycoprotein glucosyltransferase」Scientific Reports 4
 - 天文科学専攻
 - 嶋川里澄「Identification of the progenitors of rich clusters and member galaxies in rapid formation at $z \sim 2$ 」Monthly Notices of the Royal Astronomical Society 441
 - 嶋川里澄「An early phase of environmental effects on galaxy properties unveiled by near-infrared spectroscopy of protocluster galaxies at $z \sim 2$ 」Monthly Notices of the Royal Astronomical Society 448
 - 嶋川里澄「Correlation between star formation activity and electron density of ionized gas at $z=2.5$ 」Monthly Notices of the Royal Astronomical Society 451
 - 宇宙科学専攻
 - 岩崎祥大「宇宙航空研究開発機構開発報告書 高エネルギー物質研究会平成 26 年度研究成果報告書」
 - 極域科学専攻
 - 佐藤和敏「Predictability of the Barents Sea ice in early winter: Remote effects of oceanic and atmospheric thermal conditions from the North Atlantic」Journal of Climate 9号
 - 情報学専攻
 - Bui Van Thach「Robust fingerprinting codes for database using non-adaptive group testing」International Journal of Big Data Intelligence, vol.2
 - Maxime Clement「Local Search Based Approximate Algorithm for Multi-Objective DCOP」In proceedings of 17th International Conference on Principles and Practice of Multi-Agent Systems (PRIMA 2014)
 - Maxime Clement「Lp-norm Based Algorithm for Multi-Objective Distributed Constraint Optimization」In proceedings of the 13th International Conference on Autonomous Agents and Multiagent Systems (AAMAS 2014)
 - Maxime Clement「Modeling and Algorithm for Dynamic Multi-Objective Weighted Constraint Satisfaction Problem」In proceedings of the 6th International Conference on Agents and Artificial Intelligence (ICAART 2014)
 - Viktors Garkavijs「GLASE-IRUKA: gaze feedback improves satisfaction in exploratory image search」23rd International World Wide Web Conference, WWW '14, Seoul, Republic of Korea
 - Tony Ribeiro「Learning from Interpretation Transition」Machine learning Journal, 94(1)

- Tony Ribeiro 「Asp for construction and validation of regulatory biological networks」 in “Logical Modeling of Biological Systems”
- Tony Ribeiro 「Modeling and algorithm for dynamic multi-objective weighted constraint satisfaction problem」 in proceedings of the 6th International Conference on Agents and Artificial Intelligence (ICAART 2014),
- Tony Ribeiro 「A BDD-based algorithm for learning from interpretation transition」 in proceedings of the 23th International Conference on Inductive Logic Programming (ILP 2013)
- Saran Tarnoi 「Optimal cooperative routing protocol for efficient in-network cache management in content-centric networks」 IEICE TRANSACTIONS on Communications vol.E97-B, no.12
- Saran Tarnoi 「QoS-aware routing for heterogeneous layered unicast transmissions in wireless mesh networks with cooperative network coding」 EURASIP Journal on Wireless Communications and Networking 2014:81 (再掲)
- 北村大地 「Multichannel Signal Separation Combining Directional Clustering and Non-negative Matrix Factorization with Spectrogram Restoration」 IEEE/ACM Transactions on Audio, Speech, and Language Processing, vol.23, no.4
- 北村大地 「Hybrid Multichannel Signal Separation Using Supervised Nonnegative Matrix Factorization with Spectrogram Restoration」 Proceedings of Asia-Pacific Signal and Information Processing Association Annual Summit and Conference 2014
- Jingtao Sun (孫静涛) 「Dynamic Deployment of Software Components for Self-Adaptive Distributed Systems」 Internet and Distributed Computing Systems Volume 8729
- Jingtao Sun (孫静涛) 「An Approach to Dynamically Adapting Distributed System Architecture」 IEEE 33rd International Symposium on Reliable Distributed Systems Workshops (SRDSW) 14839325
- Jingtao Sun (孫静涛) 「A Policy-based Middleware for Self-Adaptive Distributed Systems」 The Seventh International Conference on Dependability (DEPEND 2014) 978-1-61208-378-0
- Jingtao Sun (孫静涛) 「動的適応可能な分散システムアーキテクチャ」 マルチメディア、分散協調とモバイルシンポジウム 2014 論文集
- 生命共生体進化学専攻
 - 川嶋彩夏 「Substrate-Dependent Evolution of Cytochrome P450: Rapid Turnover of the Detoxification-Type and Conservation of the Biosynthesis-Type」 PLoS ONE 第9巻第6号
 - 澤田紘太 「Sexual system of a symbiotic pedunculate barnacle *Poecilasma kaempferi* (Cirripedia: Thoracica)」 Marine Biology Research 10(6)
 - 澤田紘太 「The rediscovery of a rare pedunculate cirripede *Paralepas maculata* (Cirripedia: Heteralepadidae) on a sea urchin *Prionocidaris* sp. in Okinawa, southern Japan」 Marine Biodiversity Records 7